EMILE ZOLA

# NANA

# ナ　　ナ

エミール・ゾラ
川口篤
古賀照一　譯

新版世界文學全集
18

新潮社版

新版世界文学全集 18

ナ　ナ

昭和三十四年三月二十六日　印刷
昭和三十四年三月　三十日　発行

定価　参百五拾円
地方売価　参百六拾円

訳者　川口篤
古賀照一

発行者　東京都新宿区矢来町七一
佐藤義夫

発行所　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新潮社
電話東京(34)七一一一～九番
振替東京八〇八番

印刷　東光印刷株式会社
製本　荒木製本所

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

© Printed in Japan

# 解　説

＊＊
＊

フランス自然主義文学の代表者として、エミール・ゾラ（Emile Zola, 1840—1902）の名は古くからわが国に紹介され、その作品もかなりの数が翻訳されている。本篇『ナナ』も、永井荷風氏の『女優ナナ』（明治三十六年）以来、五指に余る翻訳があり、ゾラの代表作のようになじまれて来た。この作を読むに当って参考となる予備知識とでもいうべきものを記してみたい。

＊＊
＊

ゾラは、一八四〇年、パリで生まれた。父はフランスに帰化したイタリヤ人の土木技師で、母はパリジエンヌだった。三歳の時、父が運河開鑿の仕事をしていた南仏のエクス・アン・プロヴァンスに赴き、この地に十九歳まで留まったので、ゾラは、パリ児というよりむしろ南仏人である。七歳の時父を失ったため家計は苦しかったが、この地の公立中学校で二人の生涯の友を得たことは幸いだった。一人はポール・セザンヌ、他は数学者になったジャン・バチスト・バイユである。十九の時パリに出て、サン・ルイ中学に転入した。ゾラは就学が遅かったので歳を取っているし、家も貧しかったので、早く世に出ようと、大学入学資格試験を受けたが、落第してしまった。マルセイユでもう一度この試験を試みたが、それにも失敗した。

彼は学業を廃し、自活の決心を固めた。これからラテン区の貧窮生活が始まる。セザンヌが上京して来てゾラ

と同居したのもこの頃である。自活のために、税関の書記、アシェット書店の店員、小新聞の新刊紹介記者などをしながら、次第に創作生活に入って行った。技術家の子であるゾラは、はじめ理科を志していたが、中学時代から趣味は文学にあり、詩や劇や小説の作があった。いよいよ志を文学に立て、創作のほか、文芸評論や美術批評の筆も執った。初期の作品には、『テレーズ・ラカン』と『マドレーヌ・フェラ』（共に一八六八年）の二篇を除いて、見るべきものはないが、ゴンクール兄弟をはじめ文壇に知友を得て、漸くその名を知られ始めた。

やがてゾラは、バルザックの《人間劇》叢書に想を得て、一連の作品から成る一大叢書を完成しようという計画を立てた。バルザックの作品が第一帝政期や王政復古期を舞台としているのに対し、現代、即ち第二帝政期を背景にして、腐敗堕落した社会の各層を描破しようというのがゾラの狙いだった。しかし、時代を変えただけでバルザックの模倣をしようというのではない。《人間劇》の作品間の相関々係を更に緊密なものとするため、ゾラは、遺伝の宿命を負った一つの家系の五代にわたる人物をそれぞれの作品に配して、これらの人物を通じて現代の病弊を探ろうとしたのだった。

この家系の祖は、十八歳で孤児となった田舎娘アデライード・フークである。彼女の父は狂死したが、彼女もその血を承けて、ヒステリーで始終ひきつけを起し、遂には狂人となる。これより先、下男のルーゴンと結婚して一男をもうけ、ルーゴンの死後、マカールと通じて一男一女を産む。ルーゴンは健康であったが、マカールはアルコール中毒である。この三人の子孫が、叢書の各篇の主要人物を演ずることとなる。よって叢書の題名は《ルーゴン＝マカール》叢書と名づけられ、「第二帝政下に於ける一家族の自然的・社会的歴史」という副題が与えられた。

この家系の人物を一覧してみると、初代アデライードの産んだ二代目三人の人物のうち、好ましからぬ遺伝の影響で、一人はアルコール中毒患者、一人は結核患者である。三代目は三家族十一人の人物のうち、四人が病人



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

で、そのうち二名は特に甚だしく、一人は宗教気違い、一人は放火狂である。四代目は七家族十一人のうち、九人が病人で、運動失調症、精神薄弱者、宗教気違い、神経病、ヒステリー等である。五代目になると、幼くして死亡した者などあり、家族の数が少くなって、ルーゴン家の出である老医パスカルが姪のクローチルドに子供を産ませなければ、家系は絶えるところであった。

社会的地位から見ると、ルーゴンは庭番であり、マカールは浮浪人、密輸入者であり、共に田舎の下層階級である。二代目は、ルーゴンの息子ピュールが商人の娘と結婚してプチ・ブルジョワとなり、一八五一年のナポレオン三世のクー・デタに便乗して大ブルジョワとなる。一方、マカールの子孫の方は、小商人、プチ・ブルジョワ、職人などで、アル中患者が多く、概して惨めな境遇にある。この二つの血統の子孫が、第二帝政下の社会の各層にばら撒かれ、各種の職業に従事することになる。大臣、官吏、代議士、医師、新聞記者、大商人、牧師、画家、技師、炭鉱夫、鉄道員、売春婦、洗濯女、豚肉屋、兵士、百姓等々、それに両家の血筋をひかぬ者を合わせて、約千二百人の人物が《ルーゴン＝マカール叢書》に登場する。全二十巻の題名を制作年代順にあげると、次の通りである。（これらの作は、多くは最初新聞紙上に発表されたが、年代は単行本出版の年を示す。）

(1) 『ルーゴン家の繁栄』 La Fortune de Rougon, 1871.
(2) 『饗宴』 La Curée, 1872.
(3) 『パリの胃袋』 Le Ventre de Paris, 1873.
(4) 『プラッサンの征服』 La Conquête de Plassans, 1874.
(5) 『ムーレ神父の過ち』 La Faute de l'Abbé Mouret, 1875.
(6) 『ウジェーヌ・ルーゴン閣下』 Son Excellence Eugène Rougon, 1876.
(7) 『居酒屋』 L'Assommoir, 1877.

(8)『恋の一頁』 Une Page d'Amour, 1878.
(9)『ナナ』 Nana, 1880.
(10)『こった煮』 Pot-Bouille, 1882.
(11)『ボヌール・デ・ダーム百貨店』 Au Bonheur des Dames, 1883.
(12)『生きる悦び』 La Joie de Vivre, 1884.
(13)『ジェルミナル』 Germinal, 1885.
(14)『制作』 L'Œuvre 1886.
(15)『大地』 La Terre, 1887.
(16)『夢』 Le Rêve, 1888.
(17)『獣人』 La Bête humaine, 1890.
(18)『金銭』 L'Argent, 1891.
(19)『潰走』 Le Débâcle, 1892.
(20)『パスカル医師』 Le Docteur Pascal, 1893.

＊＊
＊

『ルーゴン家の繁栄』の執筆を始めたのは一八六九年五月であるから、完成まで実に二十五年、その間、殆ど規則正しく一年一作を発表し続けたことは、ゾラの性格を物語るものと言えよう。二十数巻、ぎっしり詰まった印刷で九千余頁の厖大な叢書を完成したエネルギーは驚嘆に値するが、この間、劇、オペラ、短篇、『実験小説論』（一八八〇年）、『劇に於ける自然主義』（一八八一年）、『わが国の劇作家たち』（一八八一年）等の評論も書いてい

るのだからいよいよ驚かされる。ゾラが創作に当って精密なノートをとったことは有名である。ルーゴン＝マカール家のどのような人物を主人公となすべきかを定め、その階級、職業、家族、遺伝的性質等を考え、人物のイメージが明瞭に浮かび上がるのを待ち、これに配する副次的人物の想を練り、いかなる環境でいかなる事件・場面に当面させるかを決定すると、参考書を読み、自ら実地踏査し、知友に教えを乞い、詳しい資料を整えてから執筆にかかる。ゾラの作品に接する人は、それがいかによく調べた作品であるかを読み取るに困難を感じないであろう。

『ナナ』を例にとろう。既に『居酒屋』の中で幼少時代のナナが描かれているが、アデライードから数えると、ナナはマカール系の孫娘に当る。即ち、『居酒屋』の主人公ジェルヴェーズ・マカールとその二番目の男クーポーとの間の娘である。ゾラはかねて爛熟した第二帝政期の社会のバチルス、高等娼婦を描こうと考えていた。小デュマも描いたドゥミ・モンド（花柳界）の世界を叢書から逸するわけには行かない。そこで、成人したナナをその主人公にすることにした。しかし、作者はこの社会の知識を持っていなかったので、友人のエドモン・ド・ゴンクールやリュドヴィック・アレヴィーに相談して、当時有名だった娼婦の家に案内して貰ったり、ナナが初舞台をふむヴァリエテ座を舞台裏から楽屋まで隈なく見せて貰って、ノートを取ったりした。ナナの性格や、ミュファ伯爵その他の人物についても綿密なノートが取られた。悪を意識しない、朗らかで、お人よしで、迷信家で、浪費家で、気まぐれで、近づく者に毒をふり撒き、次々に破滅させるが、悪意を以て計画的にそうするのではなく、自らは塵芥溜に湧いた青蠅のように自由に飛び回るナナの性格は、こうして出来上って行った。

この作も、はじめ《ル・ヴォルテール》紙に連載された。新聞社が派手な大宣伝をしたので、発表されるや衆目を集めたのはよかったが、不道徳のかどで非難も囂々たるものがあった。一八八〇年二月十五日にシャルパンチエ書店から単行本として出版されると、非難も一そう加わると共に未曾有の評判となり、注文が殺到して、五万五千部刷ったのが足りなくなり、即日一万部を増刷したと伝えられる。

＊＊
＊

ルーゴン＝マカール叢書を完成したゾラは、既に世界的名声をかち得たが、不道徳作家の故を以て、アカデミー・フランセーズに幾度か立候補しながら毎度落選した。以後の作には、三部作《三都物語》(『ルゥルド』Lourdes, 1894.『ローマ』Rome, 1896.『パリ』Paris, 1898.)、四部作《四福音書》(『多産』La Fécondité, 1899.『労働』Le Travail, 1901.『真理』La Vérité, 1903.『正義』は計画のみで執筆されなかった)がある。これら晩年の作は、《ルーゴン＝マカール叢書》が克明な現実探求の書であったのに対し、社会改良の意図に燃えたユートピア的色彩の強いもので、なお調べた作品の一面を残存しながら、もはや自然主義の作風からは遠く離れて行った作者の心的経緯をたどることも興味ある問題ながら、ここではその余裕がない。

＊＊
＊

ゾラの生涯で特筆しなければならないのは、ドレイフュス事件である。映画『ゾラの生涯』や大仏次郎氏の『ドレイフュス事件』などで既に御承知であろうが、十九世紀末、フランスを二分して揉みに揉んだ大事件だった。一八九四年、フランス参謀本部勤務のドレイフュスなるユダヤ人の一砲兵大尉が、軍の機密をドイツ大使館に売ったという独探の嫌疑で逮捕され、有罪を宣告されて悪魔島に送られた。その後、ドレイフュスは冤罪であり、他に真犯人があることがほぼ明らかとなったに拘らず、政府及び軍当局は国家や軍の威信を慮って、その非を押し通そうとした。ゾラは、一八九七年頃から、友人にドレイフュスの冤罪であることを聞き、フィガロ紙などに事件再審の要あることを書いたが、真犯人と目されるエステラジー少佐が放免されるのを見るに及んで、遂に意を決し、九八年一月十三日の「曙(オロール)」新聞に『予は弾劾す……』という大統領宛の公開状を発表した。その結果、

軍及び、偽りの証言をしたとゾラに非難された三人の筆跡鑑定人（ドレイフュスの手記に対する）から告訴され、それぞれ、一年及び二カ月の禁錮、三千フラン及び二千フランの罰金、筆跡鑑定人に対する五千フランずつの損害賠償の判決を受けた。控訴をしたけれどもゾラ側の言い分は取り上げられず、このまま刑に服する時は、ドレイフュス事件が闇に葬られることを恐れて、友人たちと相談の結果、ゾラは密かにイギリスに亡命して、反対運動を続けた。翌年、ドレイフュス再審の報を得てゾラは帰国したが、再審の結果はやはり有罪であった。その後、特赦により、ドレイフュス事件関係者は免訴されたが、ドレイフュスの無罪が宣せられたのは、ゾラの死後、一九〇四年のことであった。

ゾラはこの事件のため精神的にも経済的にも多大の苦痛を味わったが、不屈の正義感で闘い抜いたのは立派だった。一九〇二年九月二十九日、暖炉の残り火の不始末から、一酸化炭素の中毒により不慮の死を遂げたことは、惜しんでも余りあることだった。享年六十二、四十年間の文筆生活に、約六十巻の作がある。

＊＊
＊

ゾラは、自然主義の鼻祖とされているが、彼の自然主義理論は、当時の科学万能的風潮を多分に反映している。近代科学の進歩は、科学の力を盲信させ、一時、科学万能時代を現出させた。ゾラの自然主義の特徴は、何よりもその科学主義にある。彼の小説理論は、『実験小説論』に委曲を尽して論じられているが、その思想的淵源を尋ねれば、実証主義哲学者オーギュスト・コントであり、科学的芸術批評家イポリット・テーヌであり、実験医学の提唱者クロード・ベルナールである。コントは、人間に解ることと解らぬことがあるとして、認識に限界を認め、事実の科学的観察から、いかにしてその事実が生じたかを研究すべきで、何故にという問いを発することは越権行為であると考えた。従って、現象がすべてであり、現象は法則に従って生起するので、無生物ばかりでなく、

人間も、人間の作る国家も、厳格な決定論に従うことになる。テーヌも、認識は感覚的経験に発することを説き、現象はすべて法則に従って機械的に生起すると考え、有名な《種族、環境、時代》の三要素説を唱えた。ベルナールもコントの学説を汲んで、その著『実験医学序説』の中で、科学の行う実験的方法を人体にも採用し、任意の組織的な実験によって現象を支配する決定的条件を探り、現象即ち病気の由って来る源を尋ね、治療の法策を立てるべきことを説いている。ゾラは、これらの説を取り入れて自然主義理論を編んだわけだが、特にベルナールに負うところが多く、『実験小説論』の中で、「ここではただ翻案に類する仕事をするにとどまる……私の考えを一そう明瞭にし、それに科学的真理の厳格さを与えるためには、医師という言葉を小説家という言葉に置き換えれば、大抵の場合十分であるように思われる。」と述べている。小説家は、医家が人体を観察するように、人間や社会を観察し、人物や環境を設定するが、それは単なる現実の写真にとどまるべきではなく、更に進んで人物を実験の材料とし、様々な試練に従わせて、人物や社会の内部構造を明らかにし、それが決定論に従っていることを証明しなければならない。ゾラにあっては、遺伝の問題が重要な地位を占めることになる。彼はプロスペル・リュカの遺伝学説等を読んで、遺伝の力を誇大に考え、決定的な支配力を持っているように盲信した。《ルーゴン＝マカール叢書》は、言わば一家の遺伝の歴史である。

小説家が観察と実験との科学的方法によって、人間の情念や社会のメカニズムを把握することができれば、おのずから情念を規正し、社会を改善する方途も見出せるはずである。観念論的道徳や宗教に基礎を置く理想主義小説家と異り、自然主義作家は科学に基く実験的モラリストである。別の言葉で言えば、人間や社会の精神的病理を探る医者である。

＊＊
＊



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

このような遠大な抱負を盛ったゾラの理論も、今日これを見れば幼稚な誤りに満ちている。第一に、ゾラが師としたコントやテーヌの思想そのものが、いろいろの弱点を蔵している上、ゾラはこれらの思想を正当に理解せず勝手に利用している。「テーヌ氏の真の哲学がいかにあり得るかを私は知らない。ただその応用に於いてこの哲学を知るのみである。」と告白しているが、知らないものをいかにして応用するのであるか。ベルナールは、科学と芸術とが別個のものであり、同じ科学でも、物理学と化学と生物学とは、それぞれ方法を異にすべきことを説いているのに、ゾラは科学の方法をそのまま文学に用いようというのである。本来、科学的な実験が小説に於いて行われ得るものではあるまい。作者の選んだ人物が作者の設定した環境に置かれて、作者の意図する如く動く時、どこに実験があろう？

『実験小説』はポレミックの色彩が強く、論旨に誇張が見られるが、ゾラの作品は実際には、遺伝学説の盲信を除いて、それほど科学的ではない。むしろ抒情的な面さえあり、晩年に近づくに従ってユートピア的理想社会を夢みるに至った。科学主義をふりかざした彼の理論と矛盾していると言われても仕方がないが、ゾラの性格に警世家的情熱が潜んで居り、そもそも彼の科学主義そのものが純粋な科学主義ではなかったと言えるのであるから、純粋の客観的記録に甘んじ得なかったのは当然かも知れない。

彼の自然主義は、時代の産んだ畸形な歴史的産物ではあるが、文学を想像力とか霊感とか言われるものから切り離し、バルザックやフローベールのレアリスムを一段と推し進め、スケールの大きいロマンを創造した功は否定できない。豊富な資料に基いて筆を進めた——資料に頼りすぎる嫌いがなくはないが——こと、人間の昔ながらの情念や物欲、名誉欲・権力欲を描くと共に、第二帝政期という政治的・社会的背景とのつながりを忘れなかったこと、意志や理性から独立した本能の力に注目したことなど、従来見られなかった新らしさも見出される。第二帝政期を描破するにしては、ゾラの取材が偏している欠陥はあるものの、この時代の一面をかなり正確に伝

えていることは争われない。いろいろな弱点を蔵しながら、ゾラはやはり十九世紀の大作家であり、今日これを顧みても、教訓や示唆を引き出すことができるであろう。

ゾラは悪文家と言われている。たしかに均衡のとれない文章、奇妙な形容や比喩などが見られる。しかし、そのような欠点を忘れさせる圧倒的に力強い不思議な描写力を持っている。くど過ぎると思われる描写も、辛抱して読んでゆくと、いつしか雰囲気がじかに伝わって来る味は、バルザックから学んだものであろう。

ゾラは、思想家でも哲人でもなかった。深遠な思想や人生観を彼に求めても無理である。彼の真面目は、文学をあらゆる羈絆から解放して独立自由なものとし、社会の不正不義に対して敢然と闘い、いかなる攻撃圧迫にも退かぬ不撓不屈の精神にある。この正義の士が、夫人との間に子がなかった淋しさからか、他の婦人に二女を産ませたり、幾度もアカデミー候補に立って落選したりしたのは、彼の人間的弱点を示すものか。ただし、ドレイフュス事件に敢然立った彼を、売名の徒と詰る人があるが、売名にしては余りに大きい犠牲行為であり、《ルーゴン＝マカール》を完結して、名は既に得ていた。

明治末期に、日本にも自然主義文学と称するものが興った。フランス自然主義の影響によるものとされているが、いかにゾラの自然主義と異なるかは、発生の歴史から考えても明らかである。両者の大きな相違は、社会性の有無である。ゾラの作品には一面風俗小説的なところがあるが、戦後の日本の風俗小説といかに異なるかも考えてみてよいことだと思う。

一九五九年二月

川口篤

ナ

ナ

# 1

九時というのに、ヴァリエテ座の見物席はまだがらんとしていた。数人の観客が、二階桟敷や平土間特等席で、まだ薄暗いままのシャンデリヤの淡い光をうけて、柘榴石色のビロード張りの肱掛椅子に身を沈めたまま、開幕を待っていた。赤い大きな緞帳は闇の中に没している。フットライトはまだ点されず、楽士たちの譜面台は乱雑なままで、舞台からは物音一つ聞こえて来ない。ただ、上の方の、ガス灯の光で緑色に染められた大空の中に裸身の女神や幼児たちが天駆けっている円天井を囲む四階桟敷では、ひっきりなしのざわめきの中から呼び声や笑い声が湧き起こっていた。金で縁飾りをした円い框の下に、縁無帽や鳥打帽をかぶった頭が段々になって並んでいるのだ。時おり、一組の紳士・淑女を前にたてた女案内人が切符を手にして忙しそうに立現われては、座席の案内をしていた。そうした夜会服をきた紳士と華奢でほっそりした淑女の一組は、きまってゆっくりあたりを見回しては席についた。

平土間特等席に、二人の青年が現われた。二人は立ったままあたりを見回していたが、

——だから言わないことじゃないよ、エクトル。と年長の方の、黒いチョビ髭をはやした大柄な青年が叫んだ。早く来すぎたじゃないか。僕が葉巻を吸い終わるまで待ってよかったんだ。

この時、一人の女案内人が通りかかった。

——あーら、フォシュリーさん、と彼女はなれなれしく話しかけた。もう三十分もしなければ始まりはしませんわ。

——じゃあ、なぜ九時開演だなんてポスターを出すんだい？　と面長の顔にむっとした色を浮かべてエクトルが呟いた。しかも、この芝居に出ているクラリスが、正九時開演です、なんていったのは、つい今朝ほどのことなんだからね。

しばらく、二人は口を噤み、顔をあげて、二階ボックス席の薄暗がりの奥を目で捜っていた。だがボックス席は、壁紙の緑のせいで一しお暗かった。その下の一階桟敷に至っては真っ暗闇だった。二階桟敷には、てすりのビロードに身をもたせかけている肥った貴婦人が一人いるだけだった。高い柱の間の翼席は右も左もがらんとしたままで、長い総のついた飾幕が張りめぐらされている。白に金を配し、薄緑色に引立てられた場内は、切子ガラスの大きなシャンデリヤのキラキラする反射を受けて、まるで霧が立ちこめているように、ぼうっとかすんでいた。

——リュシーのための翼席はとっといたかい？　とエクトルが尋ねた。

——うん、だが楽じゃなかったよ。尤もリュシーが早く来すぎるきづかいはないがね、あの女のことだから、とフォシュリーは答えた。

彼は軽い欠伸をかみころした。そして暫く黙っていたが、

——君は運がいいよ、まだ、初日を見たことなんかないんだからね。この『金髪のヴィナス』は今年中での呼び物になるぜ。もう半年このかた前評判がたっているんだ。だがねえ君、鉦や太鼓ではやしたてて、さて幕を開けてみると犬ころ一匹、ってことになるんじゃないかね。商売上手のボルドナヴが大博覧会をあてこんで今まで出さずにおいたんだがね。

エクトルは謹んで拝聴していた。そしてこう尋ねた。

——ヴィナスを演ることになっている新スターのナナを、君は知ってるのかい？

——おやおや、また始まった！　とフォシュリーは両手をあげて叫んだ。今朝からナナの話でうんざりしてるんだ。二十人以上に会ってるが、会う人ごとに、こっちでもナナ、あっちでもナナだ！　ナナなんて知るもんか、まさかパリ中の女を一人残らず知ってるわけじゃあるまいし、ナナはボルドナヴのでっちあげさ。どうせくだらぬ代物に違いないよ。

こういって、彼は静かになった。だが、場内のがらんとした閑散さや、シャンデリヤの薄暗さや、ひそひそ話と扉の開閉の音だけしかない教会のような静かさが彼をいらいらさせていた。

——ああ！　いやだ、と彼は不意に叫んだ。こんな所にいたんじゃ、ひどく爺むさくなっちまう。出るよ、僕は。下に行けば多分ボルドナヴに会えるだろう。そうすれば彼から詳しい事情をきけるかも知れん。

下では、検札場のある大理石を敷きつめた大玄関にお客が姿を見せ始めていた。開け放たれた三つの鉄格子からは、四月の晴れた夜空の下に雑踏し燃え立っている大通りの活気にみちた人々の往き交いが見えた。馬車の響きがぴたりと止み、開いた扉が音高く再び閉じられると、お客が数人ずつ入って来る。検札場で立ち止まり、つき当りの二重階段を登ってゆく。婦人たちは身体をゆすりながら遅れがちにあとを追う。書割りの寺院の柱廊じみた、帝政時代風のお粗末な装飾のこの広間の蒼白い裸の壁の上に、ナナと黒い肉太の字で書きつけられた丈高い黄色いポスターが、ガス灯の生々しい光を浴びて、どぎつくならんでいた。男たちは立ちどまって、それをよんでいた。また別の男たちは突立ったまま、入口を塞いでおしゃべりをしていた。一方、切符売場の近くでは、髯剃りのあとも生々しい大きな顔の頑丈な男が、どうでも席を手に入れようとする人々に向かってつっけんどんな返答をしていた。

——やあ、ボルドナヴだ、と階段を下りながらフォシュリーが言った。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.